



ラビと師 シンドゥ・ポーターによる再話

この物語は、2020年7月4日土曜日にグループルニマーを祝う

「テンプルの中にいなさい」のサツァングで語られました。

ヤコブ・イツハークは、明らかに神を知ろうと決意した青年でした。彼は一度に何日もかけてタルムードを読みふけり、その教えを熟考しました。しかしながら彼は、彼を導くことができる師、すなわち悟りを開いた存在を見つけた場合にのみ、その神聖な輝きを本当に体験することができるだろうと確信していました。ヤコブの心は燃え上がり、知識と慈愛でよく知られるラビ・エリメレクから学ぼうと出立しました。

ヤコブが旅の途中で立ち寄った最初の場所は、アゴニアと呼ばれる小さな町でした。滞在中、彼は地元のラビの家での夕食に招待され、そこではタルムードとゾーハルについての熱心な議論が進行中でした。客たちが話すにつれて、ヤコブはラビの鋭い知性にますます感銘を受けるようになりました。彼は、この聡明(そうめい)な若いラビは、偉大な師から学んだに違いないと確信しました。しかし、ヤコブが本当に驚いたことに、ラビ・タービは、ツァッディーク、すなわち真の師の下で勉強したことは一度もないと声高に言いました。

それでも、ヤコブはラビに、自分がラビ・エリメレクに会いに行く途中であることを伝え、その旅に加わるよう誘いました。最初、ラビ・タービは肩をすくめて興味を示しませんでした。最終的には一緒に来ることに同意しました。

翌日の日没直前、彼らは賢明なラビ・エリメレクの家に着きました。彼らが対面した時、ラビ・エリメレクはヤコブを見て、次にラビ・タービを見て、そしてそのまま立ち去ってしまいました。ヤコブはびっくりしましたが、師の拒絶は彼の連れに関係があるのだと感じました。

その後、ヤコブは一人で戻り、師から温かい歓迎を受けました。彼はラビ・エリメレクに、なぜラビ・タービにそんなにもあからさまに背を向けたのかと尋ねると、師は言いました。

「時として、人が神に仕え始める時でさえ、プライドはこっそり前に出て、奉仕と混ざり合うことがあります。彼は本当の熱意を持って出発するかもしれないが、プライドが潜み、彼の奉仕に影響を落とす。プライドは、真理の炎を燃え上がらせるには不十分な火付けなのだ——そして神の真の探究者は、あらゆる犠牲を払ってそれを取り除くために、絶え間なく強い努力をする必要がある」

ヤコブは、ラビ・タービは自分自身のエゴに屈したために、師を決して求めなかったのだと理解しました。ヤコブは後に、師の言葉をラビ・タービに明かし、ラビ・タービはそれらの言葉が持つ明らかな真理を認識しました。その瞬間、彼は神に向かって振り返り、泣きながら師の所に走りました。ラビ・エリメレクは彼を心から受け入れました。ついに、ラビ・タービは道を見つけたのです。

